西陣明治の群像㉑

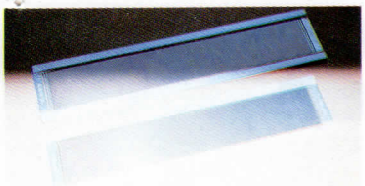
力織機の普及を促進

伊沢信三郎

筬は織機にかけられた経糸をととのえ、緯糸を通す道をつくり、さらに通した緯糸を打ちこむためのものである。その種類は数百にもおよぶといわれ、その使い分けによって変化に富んだ織物が織り出すことができる。筬のはたらきによって西陣織の味わいが深まることから考えると、目立たないが、製織の影の主役である。

筬には、古くから使用されてきた竹筬と金筬がある。

明治六年、佐倉常七と井上伊兵衛がリヨンから紋織機ジャカードを伝えたが、彼らが持ち帰った付属機料のなかにペゲョとある。これがわが国に最初にもたらされた金筬である。彼らは織殿で金筬の使用法も教えたが、当時の西陣織は高級品指向であり、さらに金属製の筬は錆が出て織物がよごれるという理由で敬遠された。しかし金筬は金属性ゆえに耐久性と安定性では竹筬に勝っている。その長所に着眼したのが伊沢信三郎である。



明治二十二年、伊沢はフランスに渡り、筬編機と付属材料を持ち帰り、西陣において初めて金筬の製造を始めている。

当初はやはり、織物がよごれるなどの懸念もあって高級織物には使用されず、繻子、傘地、リボンなどに使われるにすぎなかったという。だが力織機の導入されるようになると、丈夫で長持ち、しかも〝くるい〟のない金筬の長所が見直され、明治後期から大正にかけて、この分野ではほとんどが金筬に変ってゆくのである。そして力織機が普及した現在では筬も金属性のものが主流となっている。

西陣織の工業化は力織機の普及と不可分ではないと考えられる。その力織機の導入の端緒をひらき、地味ながら影で支えたのは、伊沢信三郎であるということもできる。

なお伊沢は、佐倉常七とも親交が深く、織機にも興味を持ち、明治三十八年ごろには、ヴァンサージ機を輸入、その模作にも成功している。

（福本武久）